

もりぬるはよからず、むかし松永秀久信長公に戦まけて、自害におよばんとせしに、百會に灸していひしは、これを見る人いつのための養生ぞやと、さこそおかしくおもふべけれど、我常に中風をうれぬ、死にのぞむも、卒爾に中風發して、五體心にまかさずば、臆したりとやわらわれなん、さあらんには、我今迄の武勇ことくくいたすら事になりぬべし、百會は中風の神灸なれば、當分其病をふせぎて、こゝろよく自害すべきとのため也とて、灸をましまして腹切りしと也、其名を惜む勇士は、かくこそあらまほしけれといひけり、

〔白石紳書二〕一此宅右衛門が子熊谷宮内は、後に水戸光圀卿に仕へけり、これ又不思議なるものにて、能の達人なる由被聞召、度々被仰付けれ共、とかくに病氣など申て終に相勤めず、或時江戸にて客設の有し時、又々仰られしに、相勤可申由を申けるが、其日に至り必ず作病を仕、御斷を申べくと思召けるに、何事なく相勤めけり、元より音に聞へし程の上手にて御感有けり、扱樂屋へ入と直に病と稱し、五十日程不能出、夫より後はたへて不被仰付、いかなる思召か有けん、頓て足輕を御預けありけり、御鷹野などの節は、いつも撰り人に召れらる、ある時夜話の折に、様々の咄を申しける、諸藝の咄になりて申けるは、士は第一藝の爲に名を奪れぬ事大事也、惡敷心得ぬれば、肩に出來たる病の首を押のける如く、藝計りになりて、其身は無用の人と成候と申ければ、甚御感有て、さすがに親が子也と仰あり、其後御側の衆へ召れ、宮内が我等申付たる能を度々うけがはぬ事、いか様にも思慮有べしと思ひけるに、我等が所存の通にて満足也と仰有し、一兩年の中に政事にも預りしとぞ、

〔徒然草下〕とこしなへに違順につかはる、事は、ひとへに苦樂のためなり、樂といふはこのみ愛する事也、これを求むる事止む時なし、樂欲する所、一には名なり、名に二種あり、行跡と才藝とのほまれなり、二には色欲、三には味ひなり、よろづのねがひ此三にはしかず、これ顛倒の相よりお

求名譽
不求名譽